

HOPE Bourgogne

サン・ベニーニュ教会

文芸評論家 饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽之友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』（新潮社）、『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

ブルゴーニュ地方の中心と言えばディジョンであるが、そのまた中心に近いリベルテ通りに入って右に折れ、5分ほど行くとサン・ベニーニュ教会に辿りつく。ブルゴーニュ風のゴシック教会で、外から見ると、さして特徴のある建物とは言えない。それは13世紀から14世紀にかけてつくられたものであるが、重要なのは地下墳墓である。その基礎は10世紀のおわりから11世紀のはじめにかけてであり、ブルゴーニュ地方ではロマネスクとして最古の一つに属する。

サン・ベニーニュとは3世紀にこの地方に布教して殉教したといわれる聖人であるが、彼に関する史料はきわめて少ない。この教会をつくった人物は、カタルーニア地方でリポール、サン・ミエル・ド・キュサ修道院等をつくり、ローマ教皇とも深いつながりを持つのみならず、たとえばリポールを当時、中世文化の一つの中心たらしめたオリバという傑出した人物、また、アキテーヌ地方出身で、博学にして鋭い問題意識をもった後のローマ教皇、ジエルヴァール・ド・リヤックらとともに、中世にその名をどめたイタリア出身のギョーム・ヴォルビアーノである。彼はサン・ベニーニュ教会のみならず、ブルゴーニュの他の教会やノルマンディの教会をつくり、後にフェカンで亡くなっている。

さてこの地下墳墓は円形である。それは長方形につづく頭部円形というべきものであるが、その古さとともに西欧で数少ない例にみられる。私は三度、この地下の薄明の闇に下りてみた。内陣に近い右側の縁にある階段をつたってゆくと、広大な柱のらび立つ空間が見えてくる。力づよい86本の石柱をもつこの世界はまるで原初の森に入った印象であり、冷気がそのあいだを流れている。ここは10世紀のおわりのままだの世界。地上とは9世紀ほどのへだたりがある。

中央の円のまわりは二重の円形列柱である。言うまでもなく、教会は地下墳墓から建てはじめるから、あらかじめ、上部の教会や塔の重さを支えるため、多くの力づよい柱を基礎において作りあげてゆく。単純で、しかも重厚である。ここはサン・ベニーニュの他に、キリストの先駆者、洗礼者ヨハネ、また聖母マリアに捧げられた空間でもある。

とはいえ、この空間は時代の古さと相まって土俗的な印象を与える。というのも、その柱頭彫刻は大ぶりの植物文様や、線刻、奇怪な人面や「祈るひと」、幻想動物等である。そこには同じブルゴーニュ地方のヴェズレーのサント・マドレーヌ教会やサン・タンダッシュ教会、オータンのサン・ラザール教会にうかがわれるような、優雅で繊細な彫刻と趣きを異にする。ちょうどサン・フィリベール教会のサン・ミエル礼拝堂の奇怪な人面が与えるような雰囲気である。別様に言えば、呪術的と言ってよい。この空間が「聖なる空間」であることを考えると、それは外からの異教をしりぞける役割をもっていたのであろうか。



サン・ベニーニュ地下墳墓・
祈る人



ディジョン

しかし、この教会には初期ロマネスク教会にほぼ共通する、粗けずりで大ぶりの植物文様と土俗的な彫刻の印象も加えて、カタルーニア地方やイタリア、トスカーナ、ウンブリア（たとえばサン・ニコロ教会）を思わせるものがあった。10世紀から11世紀にかけて、やっとな蛮族の侵入のおわったあと、徐々に身を落つけはじめたキリスト教とその教会の日常化の頃にたてられた共通する印象である。なおも、中世のその時代には基層として古いローマやガロ＝ロマンそして周辺の他の文化の属性をもとり入れていた文化が息づいていた。しかも地方性が後のゴシックに較べて強かった時代のことである。その根は深かったと言わなければならない。そうしたものを可視的にくみ上げてくるのだ。これもまたロマネスクの一つの魅力というものである。これに較べるとゴシックは教会的であり、表層的で画一的に見えるものだ。

ロマネスク教会が与えるものは、都市から遠い地方の自然にあるとともに、深さにもある。まさしくサン・ベニーニュ教会の地下墳墓の上にゴシック時代に改修された建物が存在している。その意味でも、地下墳墓は根（聖なる根）なのである。

考えてみると、ディジョンはかつて古代ローマの都市であった。中世を至ってその末期から華やかなブルゴーニュ公国の首都となる。その間もサン・ベニーニュ教会はひっそりと、しかし力強く、この町をその深みから守護神として巨大な円形列柱によって支えてきたのである。いわばこの地下墳墓は「隠された神」の住いと言ってよい。

私は薄明の中世の空間をゆっくりとくまなく歩いたあと、再び階段を上って現代のディジョンへと出てくる。さながら「歴史」を上下して行く感がある。これがヨーロッパの厚みであると思う。その後、私はブルゴーニュ公国とその終末を可視的に見ようとディジョン美術館へと向かって行った。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

問い合わせは：(株)佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ
TEL:03-3586-4558 (東機質ビル内) 担当：岩沢、田中

